



Data

監督・脚本：パブロ・ソラルス
出演：ミゲル・アンヘラ・ソラ／ア
ンヘラ・モリーナ／オルガ・
ボラズ／ユリア・ベアホルト
／マルティン・ピロヤンスキ
ー／ナタリア・ベルベケ

■ショートコメント■

◆同時期の上映されている『葡萄畑に帰ろう』（17年）は、ヨーロッパとアジアの間に位置し、圧政と複雑な歴史を潜り抜けてきた小さな国、ジョージアを舞台とした、ジョージアの老監督エルダル・シェンゲラヤによる権力闘争を風刺した人間ドラマだった。

それと似たような「帰ろう」シリーズ（？）ともいえるべき本作だが、不毛の権力争いが続く政権中央から母親が住む故郷の葡萄畑に帰った『葡萄畑に帰ろう』に比べると、本作は南米の国アルゼンチンの首都ブエノスアイレスから88歳の主人公アブラハム（ミゲル・アンヘル・ソラ）が、たった一人で郷里のポーランドに帰る旅を描くもの。しかして、彼はなぜ、今ポーランドへの旅に・・・？

◆その目的は、70年前にポーランド人の自分の命をホロコーストから救ってくれた親友に自分の仕立てたスーツを手渡すこと。なるほど、なるほど・・・。

本作冒頭、たくさんの娘や孫たちに囲まれたアブラハムが、施設に入れられようとしている自分の立場を逃れて、一人ポーランドに向かう旅に出るシークエンスが描かれる。しかし、私の目にはその動機や決心がイマイチ不明確。88歳でこれだけ幸せなら、このまま文句を言わずに余生を送れば・・・。そう思ってしまうが、それではこの映画は成立しないので、そのままスクリーンを見ていると・・・。

◆少子高齢化が進む日本では、“孤立老人”のわがままやプチギレが1つの社会問題になっているが、本作では、不自由な足をひきづりながら一人で飛行機に乗ったアブラハムのわがままぶりが目立ち、もうすぐ70歳になる“老人”の私ですら、少し気恥ずかしくなってくる。

最初にその迷惑（被害？）を被るのは、たまたま飛行機の隣の席に座って雑誌を読んでいた青年レオナルド（マルティン・ピロヤンスキー）だが、それでもマドリッドの空港に着くとこの2人は……。また、マドリッドへの片道のチケットしか持っていないアブラハムに、空港で「待った！」がかかったのは当然だが、アブラハムはそれをどう切り抜けるの？ 88歳の老人の一人旅にさまざまな難問が待ち受けているのは当然だが、本作ではマドリッドのホテルの女主人ゴンザレス（アンヘラ・モリーナ）も、ポーランドへの列車内で隣り合わせたドイツ人の文化人類学者の女性イングリッド（ユリア・ベアホルト）も、なぜかめっちゃ親切でいい人ばかり。まあ、本作はそんな映画だからと割り切って観ればいいのだろうが……。

◆本作最大の難問は、ポーランド人のアブラハムがいかにしてあの“嫌な国”ドイツの土を踏まずにポーランドに行くかということだが、そのためには誰が考えても飛行機で行くしかない。したがって、この問題は最初からナンセンスな解決不可能な難問だが、とにかくそれが本作最大のテーマになる。そのため、イングリッドは“ある工夫”をするが、それって一体何の意味があるの……？

そんな風に見ていると、少しずつアブラハムの目標が近づき始め、そしてついに……。結果はめでたし、めでたしとなるからいいのだが、このロードムービーには果たしてどんな意味があったの？ チラシには「世界中から大絶賛！ 観客賞総ナメの感動作！」と書かれているが、私には本作の出来はイマイチ……。

2019（平成31）年1月10日記